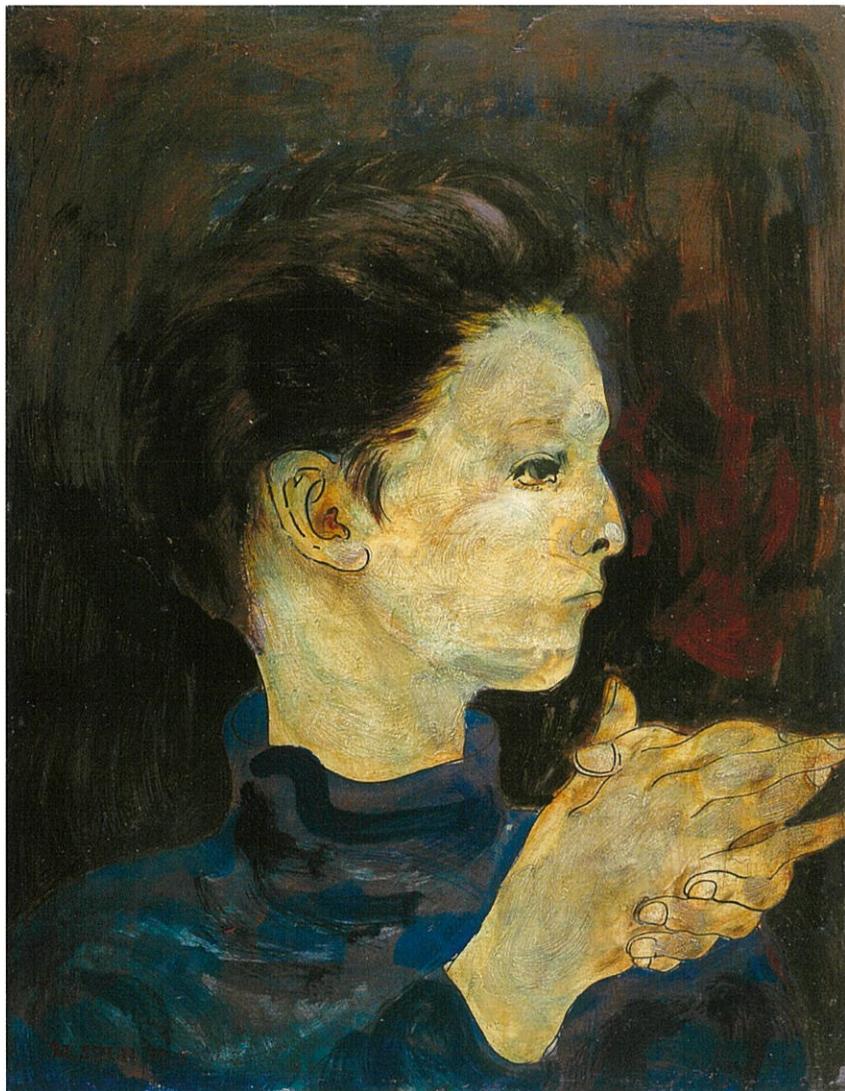




大川  
美術館

2024年月3月31日発行  
公益財団法人 大川美術館  
〒376-0043 桐生市小曾根町3-69



松本竣介《婦人像A》1942年 油彩・板 35.0×27.6cm

## ことば 140

バックの暗い赤と白いマーブル調の肌の対比を鋭い線でコントラストさせながら厳しい画品を漂わせ、特に生活を感ずる手が美しい。

(大川栄二『大川美術館 所蔵192 選 松本竣介をめぐる近代洋画の展望』1989年より)

# 「大川栄二生誕100年記念 コレクターの目」展について

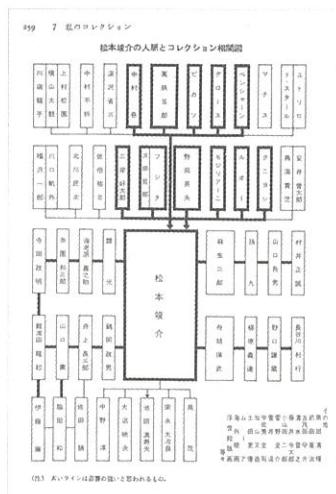
大川美術館の創設者で初代館長の大川栄二は、1924(大正13)年3月に桐生で生まれています。当美術館は、1989(平成元)年4月に開館しましたが、大川は2008(平成16)年に亡くなるまで館長として運営にあたっていました。仕事の傍ら「サラリーマン・コレクター」と自称しながらコレクションをはじめ、それまでに収集した1200点あまりの作品をもって美術館を開館しました。開館後も収集は継続して、現在では7500点を超えてています。

この度は、大川栄二の生誕100年を記念して、ひとりの個性的な感性と美に対する情熱をコレクションを通してご覧いただくために、下記のように2部構成で企画しました。

第1章 大川栄二の「松本竣介・野田英夫と人脈」

コレクションのきっかけとなった松本竣介と野田英夫の作品を中心に、収集の幅をひろげていきました。そのなかでつくりあげたのが、「松本竣介・野田英夫と人脈」図です。画家の師弟、交友、影響の関係をもとにつくりあげた「人脈図」は、ユニークな内容です。この「人脈図」は、美術の歴史という時間軸も、国、地域という空間軸も無視した、ひたすら松本竣介と野田英夫という、大川栄二が惚れこんだふたりの画家を中心としたコレクションの見取り図です。同時に、ひとりのコレクターの関心、興味の拠りどころという感性と頭の中の図表ともいえます。

しかもこの「人脈図」は、コレクションがすすみ、また画家への関心が広がり、深まっていくにつれて拡充、増幅していくのです。



大川栄二『美の経済学』  
(東洋経済新報社、1984年、p.259)

美術館創立以前になりますが、大川栄二の最初の著作『美の経済学』(東洋経済新報社、1984年)には、すでにこの「人脈図」が掲載されています。

今回の展示にあたって、開館当時に大川自身が作成した「人脈図」（『大川美術館 所蔵192選松本俊介をめぐる近代洋画の展望』、大川美術館、1989年）の方をパネルにして掲示しましたが、それと比べても拡大しているのが明らかです。したがって、この「人脈図」と作品は、コレクターその人自身の個性といえるかもしれません。

## 第2章 大川栄二の「異色」の画家たち

もうひとつ「人脉図」とならんで、その個性を感じさせるコレクションとは、大川栄二にとっての「異色」の画家たちの作品群です。大川にとって「異色」の画家とは、「一途に詩魂を塗り込めながら夭折するか、時流に媚びず、あくまでもその強い個性的画趣のために常に在野であり、生存中は一般的には無名」であったということでした。もっともアートの世界では、いつの時代でも「個性」が光り、平凡であってはならず、その点でどのアーティストも「異色」といえますが、そこに「時流に媚びず」、「在野」、「無名」の言葉を加えると、意味が限定されてしまいます。この「異色」の定義にしたがえば、松本竣介もしかり、野田英夫もしかりとなります。つまり、コレクター大川栄二の目で選んだ画家たちのほとんどが、「異色」ということになってしまいます。しかしながら、どうも美術のメインストリームの流れからはずれてしまうことから、展示をする機会が少なかった下記の6名の孤高の画家たちの作品を「異色」の画家たちとしてご覧いただくことにしました。

加賀孝一郎（1899-1988）

難波田史男（1941-1974）

村上肥出夫（1933-2018）

島崎 薩助 (1908-1992)

鈴木 滿 (1913-1975)

掛井 五郎 (1930-2021)

これらの「異色」の個性を通して、大川栄二の目をさぐると同時に、今も新鮮に感じられるのか、どうぞ展示室にて作品と向きあってみてください。

なお、今号の「ガス燈」では、それぞれ学芸員の時代に大川栄二に接し、励まされた徳江庸行氏

(群馬県立近代美術館教育普及員、当館理事)、江尻潔氏(足利市立美術館次長)のお二人に寄稿をお願いしましたので、是非お読みください。

(大川美術館長)

## 「大川栄二生誕100年記念 コレクターの目」展を見て

徳江 庸行

「そうでしょ」。大川美術館に呼ばれて行くと、大川栄二館長の話にそう同意を求められた。いや、大川館長にしてみれば、誰かに話したいだけであって、私に同意を求めるわけではなかったのかも知れない。話が熱を帯びると「そやろ」と関西弁になり、こちらがぼそと返答すると、「ハアッ」と顔を歪めて聞き返してきた。その話とは絵の話ではなく、主に美術館の運営についてであり、「君の悩みを聞いてやろう」といったところから始まったものの、すぐに館長自身の話へと入れ替わり、こちらは殆ど聞き役にならざるを得なかった。時に昼間から夜に及ぶこともあります、途中で大川館長だけ食事をとりながら話すこともえあった。そんなわけで、大川館長がコレクションした作品や作家のことについては、あまり聞いた記憶がない。一つ鮮明に憶えているのは、大川館長が『母と子のために 絵のみかた、たのしみかた』(1992年刊行)のゲラ刷りを見せながら、一点一点の説明文を読み聞かせしてくれたこと。そして、読み終えると意外にも「いつも同じになっちゃうんだよな」とポツリと呟いたことである。その時、独特の「大川節」で語る館長でさえも作品の解説をすることは難しいことなのだと思った。また私が勤務していた群馬県立近代美術館でコレクションしたいような作品を、大川館長が手に入れた時などには「いいでしょ」と得意げに話された。今回、大川美術館のコレクションを改めて見て、大川館長の声とともにそのしたり顔を思い出した。

コレクションの中から選定されたこれだけの作品でも、個人でよくぞ集めたというほかない。大川美術館を訪れた天皇陛下からの「大川さんは、サラリーマンでなぜ、このような名画を集められたのですか」という質問に「錢がなかったから、虚名でない生前無名の本物を物色できた」と大川

館長は応えているが、それだけでは「逢いたいときにいつでも逢える 名画の館」にはならなかつただろう。「今、いくつかの名品がどのようにして手に入ったかを振り返ってみると、皆、それぞれに懐かしいストーリーがあり、自然と集まつものだから面白い」と大川館長は述べているが、決して自然に集まることはないと思う。これらの作品は、大川館長がいう「やむにやまれぬ気持ちで買ってしまったもの」なのだろうか。コレクションした作品一点一点の物語について、もっと伺つておけばよかったと後悔するが、一体どれくらいの時間が必要だったろう。いや、時間だけかけても話してもらえなかつたと思う。

今回は約200点の展示作品の中から、以前から気になっていたイサム・ノグチの肖像彫刻を取り上げてみたい。

『スザンヌ・ジーグラー』(1932年)は頭像と台座の円柱を合わせると高さ207.5cmの作品である。スポットライトの光に照らされて影を落とす白い相貌を鑑賞者の多くは仰ぎ見ることになる。大川館長は、この台座の高さが重要なだと話していたそうであるが、黒く塗られた丸太のように見える台座は、展示するには極めて不安定である。今回の展覧会のみならず展示される機会の多いこの作品は、1991年のクリスティーズのオークションで大川館長個人が落札し、1999年に大川美術館の所蔵作品となつたという。公立美術館では難しいオークションによって収蔵された作品は、大川美術館にはこの作品のほかにも少なからずあり「名画の館」を形作っている。

1989年、ワシントンのナショナル・ポートレート・ギャラリーで開かれた「イサム・ノグチ肖像彫刻展」のカタログによれば、モデルのスザンヌ・ジーグラーとノグチは彼の広報係エレノワ・ランバルトを通じて出会つたという。1929年、パリから帰国したノグチはニューヨークにアトリエを構えて本格的な創作活動に入った。しかしこの年、ニューヨークの株式市場暴落をきっかけに世界恐慌が始まり、暗い時代へと入っていく。ノグチも前衛的な彫刻では暮らしていくはずもなく、制作費を稼ぐために多くの肖像彫刻を制作していた。

ノグチはこの作品を1932年12月、ニューヨークのラインハート・ギャラリーでの展覧会に出展している。ジーグラーはニューヨークに生ま

れ、父親はメトロポリタン歌劇場の副総支配人であった。また、彼女は1926年に編集の仕事を始め、『House and Garden』『Vanity Fair』などの雑誌編集や編集長も務めたフリーランスのライターであった。

ノグチは頭部をまず粘土でつくり、それから石膏掛けした木に直に彫刻をした。また、彼は未塗装の木材でもう一つのヴァージョンを制作し保管していた。ジーグラーはこの肖像を彼女の母親にクリスマスのプレゼントとして贈ったが、母親はその肖像が気に入らず、壊したいと考えていた。しかし、幸いにもジーグラーと結婚したばかりの相手、チャールズ・グリーブスがこの肖像を気に入り、彼女のコレクションとして残されたという。そして、ナショナル・ポートレート・ギャラリーでの展覧会に展示された2年後に、オークションに出品されたことになる。

大川美術館の館長室で写真家、安齊重男が撮った写真には、この作品の前で笑顔を見せる大川館長がいる。彫像はまるで守護神のように背後で静かに目を閉じている。この作品はノグチの肖像彫刻のなかでも最も美しい「名品」といえる。

（群馬県立近代美術館教育普及員・当館理事）

※本稿を執筆するにあたり、大川美術館の学芸員、小此木美代子氏、大谷明子氏から資料提供、翻訳の協力を得ました。謝して御礼申し上げます。



大川栄二（1992年、安齊重男撮影）  
©Estate of Shigeo Anzai, courtesy of Zeit-Foto

## 魂の糧としてのコレクション

江尻 潔

初めて大川栄二氏にお会いしたのは1993年だった。足利市立美術館準備室（この時は中央美術館準備室）の学芸員となって間もない頃だと思う。遠藤武幸室長（のち館長）に連れられて大川美術館にあいさつに行った。私は一応、学芸経験者として足利市に就職した。経験者といっても財団法人山形美術館に3年勤めただけだった。見習いを了え、ようやく企画を任せられるようになっていたが、家庭の事情で実家に戻らざるを得なかった。そんな私を足利市が拾ってくれたのだ。

大川氏は山形美術館をご存じで、財団法人の厳しい事情に言及し、その感覚を忘れぬようにとアドバイスして下さった。遠藤室長が公立でも資金繰りが大変である旨伝えたところ大川氏は「お金のことは二の次です。そもそも芸術はお金と関係ない」と言われた。そのことがとても印象に残った。

94年4月、足利市立美術館がオープンすると大川氏は企画展の内覧会に幾度も来て下さった。96年、郡山市立美術館の小泉晋弥さんにお声がけいただき「煙と霧 若林奮展」を開催する運びとなった。大川氏は展覧会をご覧になり、「若林の作品は難解であり、私はこの年齢でようやく分かりつつある。君に分かるのか」と問われた。「これから徐々に分かるようになると思います」と答えたところ、氏は笑っていらっしゃった。前年開催した、桐生のテキスタイルプランナー新井淳一とステンレススティール造形作家の熊井恭子の二人展開催の折りは勞ってくださった。99年の「牧島如鳩展」では「この作家は君が見出したのか。すごいね」とお褒めの言葉を頂きとてもうれしかった。しかし、大川氏は展示以外にも目が届き、「ところで僕の美術館のポスターが貼っていないじゃないか」と苦言を呈された。私はしまったと思い、その後チェックを怠らなかったのは言うまでもない。今になっては懐かしく思い出される。

さて、この度、「大川栄二生誕100年記念コレクターの目」を拝見した。コレクションそのものが作品なのだということを改めて思った。大川氏のコレクションは週刊誌の表紙に使われた絵画図版から始まった。さしづめこれは「初期作品」に